

「美しい言葉とは」より

いつまでも忘れられない言葉は、美しい言葉である——二つは殆んど同義語のように私には感じられてならない。忘れられないというのは、よくもわるくも一人の人間のまぎれもない実在を確認した、ということを意味するのかもしれない。たとえこちらの胸に刺のよう突きささつているものであつても。

乱れていようが、珍妙であろうが、「ああ、久しぶりに人間の言葉を聴いた」という、一種のよろこびを呼びさましてくれるもので、私は美しい言葉だと思つてゐる。

# 茨木のり子集 言の葉

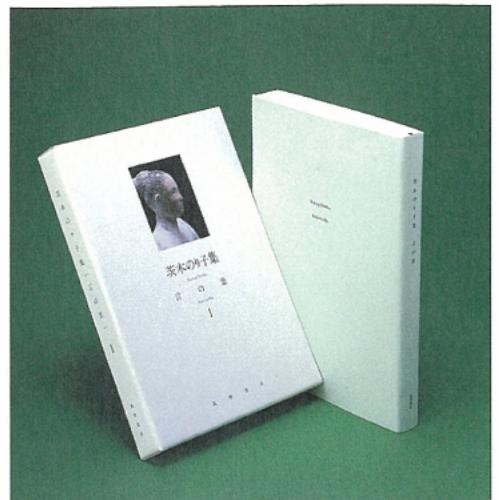


全3巻



しんとして  
深く 動く  
問いつづける  
美しい言葉とは  
そして 生きるとは

詩とエッセイで編む、詩人のエッセンス



第一回発売 8月10日 第一巻

4-480-70561-9 3200円(税別)

第二回発売 9月26日 第二巻

4-480-70562-7

第三回発売 10月25日 第三巻

4-480-70563-5

◎本シリーズの特色

- ・半世紀にわたる詩人の歩みのあとを、年代順による詩とエッセイで編む、自選作品集。
- ・単行本未収録のエッセイやラジオドラマも収録、その魅力の全貌をコンパクトに收める。

◎造本・体裁

A5判・並製

ノンステッチ小口折り機械函

装幀＝吉田篤弘・吉田浩美

函作品＝高瀬省三

撮影＝坂本真典

◎ご注文・お問い合わせは下記の小社サービスセンターへ  
〒331-8507 さいたま市櫛引町2-604  
TEL048(651)0053 FAX048(666)4648

茨木のり子集 言の葉【全3巻】を ◎お申込書店  
申し込みます

お名前 \_\_\_\_\_

ご住所 \_\_\_\_\_

お電話番号 \_\_\_\_\_

02.08 asahi 1,0

茨木のり子  
1926(大正15)年6月12日、大阪に生まれる。幼年期を愛知県西尾市で過ごす。1942年、父の病院開業により、愛知県幡豆郡吉良町に移る。1943年、帝国女子医学、薬学・理学専門学校(現、東邦大学)に入学。1945年、19歳のとき、学生運動員で海軍療品廠で就業中、敗戦の放送を聞く。翌年、練り上げ卒業。戯曲や童話を書く。1949年、医師・三浦安信と結婚。1953年、詩学研究会に投稿していた川崎洋と詩誌「懽」を創刊。1975年、夫死去。1976年より、韓国語を習いはじめる。

## ◎全巻内容――

自分の感受性くらい

ぱさぱさに乾いてゆく心を  
ひとのせいにはするな  
みずから水やりを怠つておいて

詩集 対話 より  
見えない配達夫 より  
鎮魂歌 より

言の葉 1 (1950~1960年代)

エッセイ

はたちが敗戦  
第一詩集を出した頃

「權」小史  
語られることはばとしての詩

ラジオドラマ 埼輪  
童話 貝の子ブチキュー  
民話 おとらぎつね  
評伝 うたの心に生きた人々 より

山之口貌

言の葉 2 (1970~1980年代)

詩集  
人名詩集 より  
自分の感受性くらい  
寸志 より

エッセイ 金子光晴――その言葉たち  
最晩年 山本安英の花  
花一輪といえども 谷川俊太郎の詩

祝婚歌 驚かされること  
机が似合わない 井伏鱒二の詩

散文 東北弁

百年目

清談について

「戒語」と「愛語」

美しい言葉とは

おいでけぼり

いちど見たもの

ハングルへの旅 より

ものに会う ひとに会う

倚りかからず

もはや  
できあいの思想には倚りかかりたくない

もはや  
できあいの宗教には倚りかかりたくない

もはや  
いかなる権威にも倚りかかりたくない

もはや  
ながく生きて

心底学んだのはそれぐらい

じぶんの耳目  
じぶんの二本足のみで立つていて

なに不都合のことやある

倚りかかるとすれば

それは

椅子の背もたれだけ

言の葉 3 (1990年代~)

詩集  
食卓に珈琲の匂い流れ  
倚りかからず  
(詩集未収録作品)

エッセイ

歌物語 女へのまなざし

平熱の詩

尹東柱について

韓の国の白い花

一本の茎の上に

内海

涼しさや

もう一つの勧進帳

品格について

去りゆくつうに

自分の感受性くらい  
自分消えかかるのを  
暮しのせいにはするな  
そもそもがひよわな志にすぎなかつた  
駄目なことの一切を  
時代のせいにはするな  
わずかに光る尊厳の放棄  
近親のせいにはするな  
なにもかも下手だつたのはわたくし  
苦立つのを  
氣難かしくなつてきたのを  
友人のせいにはするな  
しなやかさを失つたのはどちらなのか